

大阪 ニュース

近大・森本教授の

痛み学入門講座

◆ 1 ◆

「痛み」は厄介だ。ごく身近で日常の問題である。頭痛、腰痛、生理痛、寝違えによる首の痛み……。痛みを経験したことがない人はまずいない。本人にしか分からない主観的な感覚で、それをつらいと思うことには感情(情動)も伴う。だから厄介なのだ。痛みがあっても、周囲、さらには医者さえ理解してもらえず、独りぼっちで戦っている人も多いはずである。

書店には医療や健康を扱った本が並ぶ。痛みに関するものも多く、「痛みは消える」「痛みよ、さらば」等々。ただ、痛みを完全に取り去ることは可能か。あるいは痛みは無くしてよいものなのか。これらを書いていねいに書いた本は決して多くない。誤った情報に振り回され、何科を受診したらいいのか右往左往し、ドクターショッピングを繰り返す人もいる。

◇ ◇  
哲学者で偉大な生物学者だったアリストテレスは、「痛みは魂を強くする」と言った。彼にすれば、痛みは必然の産物に他ならなかった。現代医療でも、痛みを病気の症状のひとつにすぎないとの考えが残っている。加えて、わ

「痛み」を考えてみよう

我慢するのは美德ではない

が国には我慢を美德とする風潮が根強くあり、少女の痛みでの受診をためらう人も多い。一方で「検査で異常がないのだから、気のせいでは……」と医者から相手にされなかったという経験談も聞く。



イラスト 西尻幸嗣

しかし、痛みが激しくなれば、身体を動かすこともままならず、人間性を失ってしまうことさえある。不安になり怒りやすくなり、他人への気配りを忘れてもする。痛みは本人だけでなく、周囲も憂鬱にしまうのだ。だから我慢するのは決して美德ではなく、「魂を強くすることにもなり得ない」と考える。

痛みは病気の単なる症状なのだろうか。たしかに原因となる病気の治癒によって、消えて無くなる痛みもある。一方で、放っておくと深刻なことになる痛みも存在する。痛みを引き起こす神経の興奮が、新しい激しい痛みを生み出してしまふのだ。またもともあつた痛みにさまざまな悪い要因が重なり合って、より強い痛みを作り出すことだってある。この点について近年、「痛みの記憶」に関する研究が進み、脳や脊髄の細胞に記憶された痛みが、「遺伝子修飾」を引き起こして、さらに痛みを難治化させること

医学の歴史は痛みとの戦いの歴史で、痛みの仕組みを理解し、それを克服するための努力を積み重ねてきた。だから、痛みと向き合うのは医療の原点だと考える。だが、主観、情動としての痛みの深層を、客観的なメスで覗き込むには多くの壁がある。末梢にある痛み情報の受け皿(受容体)やその情報(インパルス)を脳に伝える神経回路、神経間での情報の受け渡しを担う物質(伝達物質)、痛みを認識する脳の部位(投射部位)が明らかにされつつあるが、解明できていないことも多い。

患者さんが痛みを感じ、つらいと思う個人的な情緒的状态に加え、周囲の状況、社会的状態の影響の大小を鑑みなければその本質は見えない。一筋縄ではいかないのだ。連載では、痛みの成り立ち、仕組みをていねいに掘り下げて考えてみたい。また、ペインクリニックの適応となる疾患とその治療法を紹介していく。

肩こり痛の患者さんに注射する筆者



(近畿大学医学部麻酔科教授 森本昌宏)